鍾繇書・試論
―新出の簡牘及び残紙を手がかりとして―

An Essay on Zhong Yao: With Newly Unearthed Slips and Paper Fragments as Clues

大橋修一
Shuichi Ohashi

一

鍾繇（一五一―二三〇）、字は元常、潁川長社（河南省）の人。後漢の献帝の時、孝廉に挙げられ、尚書郎・陽陵令から、のち侍中・尚書僕射となり、東武亭侯に封ぜられた。後に魏の太祖曹操に仕えて宰相となり、明帝の時、太傅に進み、定陵侯に封ぜられた。太和四年（二三〇）、八十歳で卒して成侯と諡された。このはなばなしい略歴に比べて、かれが能書家であったことは『三国志』魏書巻一三には一行も見えない。けれども同じく魏志巻十一の管寧伝に「胡昭は史書をよくし、鍾繇、邯鄲淳、衛顗、韋誕とともに、並びに名があり、尺牘の跡は、ときとして、模楷とさる」とある。当時は、尺牘の書体とされたのは行草体であった。ほか俗伝としては、晋の虞喜の志林（『重較説郛』巻五十九）や、『大平広記』巻二百六がある。また、かれが作った文章としては、魏書に伝えられている書疏のたぐいと、法帖に残された上表文と書簡文だけである。これらのものが伝えられている背景には、単に資料としてだけでなく、かれがこれを作り、また書写するのに巧みであったことが大きな要因と思われる。

鍾繇については、中田勇次郎氏が、『中国書道史』巻三において、文献を詳細に吟味し、書道史上の意義について論じている。したがって、ここでは省略する。ところで、鍾繇の書の実相となると中田氏も「古来その書跡の伝わるものがまれで、今はその信頼しうるものが残っていないこと」と述べる。確かに、かれの作品は、刻帖に残されている伝存の上表文のたぐいだけである。虞和の『論書表』に、王羲之が「このごろもろもろの名書を尋ねるが、鍾（繇）、張

芝は信に絶倫となす」といい、その書の妙味をたたえてはいるが、その絶倫の実体となると、刻帖から想像する以外に手がないのが現状である。

ところで、近年、鍾書の実相を刻帖以外から探る手がかりが出土している。一つは、二〇〇四年、湖南省長沙市東牌楼から出土した後漢の簡牘がそれである。簡単に紹介すると以下の如くである。総数は四二六枚、その内有字簡が二〇六枚。形制からすれば、木簡・木牘・封検・名刺・簽牌などである。書体もバリエーションに富んでいて、篆書・行書・草書と初期の楷書のひな型とおぼしきものまで広範囲に及ぶ。紀年は建寧まで、すべて後漢の霊帝期（一六八―一八八）に属する。この時期、漢隷の名品の多くが存在し、史晨碑（一六九）を筆頭に、西狭頌（一七一）、郙閣頌（一七一）、楊淮表紀（一七三）、熹平石経（一七五―一八三）、曹全碑（一八五）、張遷碑（一八六）がある。

二つ目は、二〇一〇年に長沙市の五一広場から出土した東漢簡牘である（『長沙五一広場東漢簡牘（1・2）』）。総数で六八六二枚。大多数は官文書である。ほか、封緘に用いる封検や函封、また内容を標識する楬（簽牌）なども発見された。時代は後漢の章和（八七年～八八年）、永元（八九～一〇四年）、元興（一〇五年）などの紀年があり、一冊、二冊ともに四〇〇枚を収録する。したがって、東牌楼簡と、この五一市場の紀年簡を整理すると、後漢の八七年から一八八年までの約百年の書体の変遷が窺われる。さらに二〇一二年には同じく長沙市の尚徳街から霊帝期の熹平（一七二～一七七）、光和（一七八～一八三）の簡牘が出土した。ただし、残欠が多く、文字も不鮮明である（『長沙尚徳街東漢簡牘』）。しかしながら、これらの出土資料によって鍾繇の書の変遷も断片的ではあるが、推論を加えることが可能となったのである。

二

ところで鍾繇は魏において活躍した人のようであるが、存命中の大半は曹操と同様、後漢で活躍した人なのである。前述したように、はなばなしい略歴ではあるが、魏国での活躍のほどは、わずか十年で、かれの一生からすれば八分の一に過ぎない。東牌楼簡牘が書写された霊帝期は、鍾繇十七歳から三七歳に相当する。次の献帝になって孝謙に挙げられ、尚書部・陽陵令となり、その後、病のために退官している。したがって、霊帝時代に、かれがどのようにして書法に習熟したかについての詳細な記録は不明である。しかし、霊帝についていえば『四体書勢』によると、書の愛好家としての記載がある。また『書断』にも「霊帝はことに書をこのみ、当時、書を巧みにしたものを鴻都門に招き集め、数百人が集った」という記事か

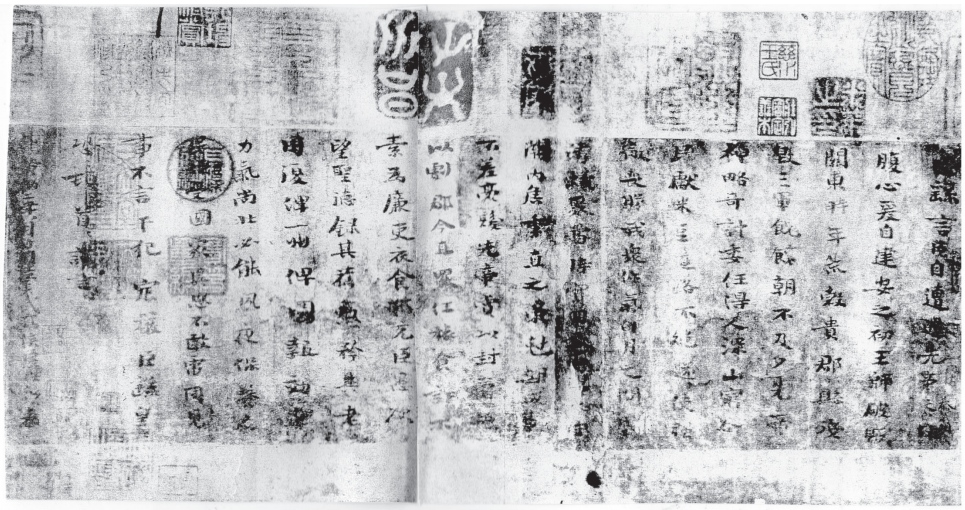
らみても、書に対する愛好家ぶりが窺われる。さらに、書に堪能な蔡邕（一三三―一九二）が、霊帝の裁可を得て、熹平石経（一七五―一八三）に自ら書丹したのもこのころである。多感な時期に時代の風気を十二分に肌で感じたことは、のちのかれの書法に多大な影響を与えたことは想像に難くない。

ところで、羊欣の『古来能書人名』によると、かれが得意とした書には、「銘石書」、「章程書」、「行狎書」の三書体があった。一つ目の銘石書は碑に書する書体である。当時の書体から考えれば、八分の隷法で相当するであろう。『書品』に「許昌の碑を妙尽し、鄴下の牘を窮極する」とある。かれが碑と尺牘をよくしたことを述べたもので、受禅碑や上尊号碑を指したものと思われるが、確証はない。

二つ目の章程書は、「秘書官に伝えて小学を教えた」ものである。つまり学校で教え、正式文書に使われる書体。現在の楷書にあたると推測される。鍾繇の作品としては、宣示表（図1）や薦季直表（図3）などの作品を指しているのであろうか。ところで、『古来能書人名』に王廣（?―三九二）は「章楷をよくし、鍾（繇）の法を伝う」とある。ちなみに王廣は王羲之の師である。この章楷も同じく、楷書を示すものと思われる。「淳化閣帖」巻二に、王廣書が見られるが、鍾繇書の脈流を窺わせる（図4）。

三つ目の行狎書、これは相聞、つまり尺牘に用いる書体をいう。今日の行書の祖となった書体である。鍾繇の作品では「墓田丙舎帖」などを指すと思われる。鍾繇が行書を得意としたことは『四体書勢』に「魏初鍾（繇）と胡（昭）との二家がいて、行書を得意とし、ともにこれを劉徳昇に学んだ。鍾繇の書はやや変化があった」とある。『書品』にも「劉徳昇のよいところを鍾繇と胡昭が取り入れて、胡は肥えていたが、鍾の書は痩せていた」とある。劉徳昇は『書断』によると、「潁川（河南省）の人で、桓帝・霊帝のころ、行書を作り出した人として、その名をほしいままにした」という。今日の資料から見ると作り出したというのは伝聞にすぎない。ただし、桓帝・霊帝のころ劉徳昇から行書を習った記事は書論の中にも多く散見している。ひとまず、法帖に伝模された鍾繇の書と呼ばれる作品を、新出の簡牘と比較検討してみよう。

（図1）宣示表



（図2）薦季直表・墨跡本

（図3）薦季直表

（図4）王廣の書

三

梁の周興嗣の千文字の中にも「杜藁鍾隷」の句があるように、最もかれが得意とした楷書作品を取り上げてみたい。ところで、楷書の中でもとりわけ古意を存していると指摘される薦季直表は、かれの他の楷書作品とはいささか趣を異にしているようである。鍾繇の楷書作品の中で、この作品をどのように理解し位置づければよいの

であろうか。

その前に刻帖に伝存する鍾書や、鍾書を考える上で参考ともなる出土物についても研究されているので少しふれておこう。鍾書の楷書や行書作品は、実のところほとんどが展転伝模された法帖によって残されているだけである。宣示表をはじめとして、薦季直表、還示表、力命表、賀捷表、墓田丙舎帖、それに「淳化閣帖」中には白騎遂内帖、雪寒帖、得長帖などがあるが、そのほとんどが刻帖によるものである。それでも近年、鍾繇の楷書について、西川寧氏は「詣鄯善王の封検から、楷書書体成立期を二六九年ごろと比定し、さらに鍾繇の法帖による伝承された作品は、どうやら真実に近いもの」と推論している。一九八四年には、安徽省馬鞍山からの呉の将軍、朱然（一八二―二四九）の刺（名刺）も出土した。これも見事な三過折が具わっていて、鍾繇の死後からわずか三十年しか経ていない。また一九九六年には湖南省長沙市の走馬楼から十万枚にのぼる孫権時代の竹簡と木簡が出土した。年号のもっとも早いものでは後漢の献帝の建安二十五年（二二〇）、遅いものでは呉の孫権の嘉禾六年（二三七）の紀年がある。東牌楼簡牘の出土地ともはなはだ近く、その類似性も注目されるが、この簡牘は実は鍾繇七十歳から没年までと重なるのである。この点については福田哲之氏が「楷書の成立と鍾繇（『文字の発見が歴史を揺るがす』）の中ですでに論じている。ところで、この薦季直表は、正確に言えば『薦関内侯季直表』と呼ばれる。内容は、魏の文帝（曹丕）にあてた上表文である。ただし、この表については巻末に「黄初二年八月日。司徒・東武亭侯・臣鍾繇表」の一行があるために、偽書説も存在する。この偽書説を主張するのは孫承沢（一五九二―一六七六）の『庚子消夏記』巻五や王澍（一六六八―一七四三）の『虚舟題跋』巻五である。王澍の論点を示すと次のようになる。

①黄初二年（二二一）は鍾繇は廷尉に改められ、崇高卿侯に封ぜられたはずである。後漢の献帝の初平三年（一九二）ごろの東武亭侯であったのを、魏の文帝への上表文に漢代の官名を書くのは不自然である。また、司徒とあるが、当時の司徒は華歆である。司空は王朗である。文帝は鍾繇とあわせて、この三人を一代の偉人として称揚しているくらいである。

②文中の表の中には、季直の功績について「先帝（曹操）賞するに封爵をもってし、授くるに劇郡をもってす」とあるが、魏志には季直の伝さえなく、史実には合致しない。

③書は古雅であるが、この表は宋の李公麟の偽作であって、唐宋より称述されていない。元の時、陸行直が、巻後に鍾繇の官名があるのみで、みだりに真跡としてしまったのであるという。

ただし一方では擁護論もある。欧陽輔は『集古求真』巻一に「戲

魚堂帖」（北宋の劉次荘刻）中にも刻入されており、唐宋以来称述されていないという王澍の見解は失考であるといっている。近人裴景福も「秘閣続帖」（南宋の孝宗勅刻）にも、この表があるといい、見解は欧陽輔と同じである。しかし、根拠も示し得ないのである。問題の多い墨本ではあるが、元時代の陸行直の跋によると、至元甲午（一二九四）に入手し、まもなく失去したが至正九年（一三四九）に再び入手したという。

明の中頃には沈周（一四二七―一五〇九）が入手し、ついで華夏にわたり、「真賞斎帖」上巻に模入された。また王肯堂の「欝岡斎帖」（劉鴻臚摸勒）や、「玉煙堂帖」（陳元瑞編）、「秀餐軒法帖」（陳息園編）並びに「翰香館法書」にも刻入され、清初に御府に入って三希堂帖に刻入されたが、さらに近人裴景福が入手して、「壮陶閣帖」にも刻入した。その後、墨本は盗まれ土中に埋められ発掘したときは腐乱していたという。しかし、真跡の写真が一九八四年の『書法』（上海書画社）や、『中国書法芸術』（魏晋南北朝）にも掲載されている（図2）。ともかく、この季直表は疑念の多い刻帖ではある。しかし、批判を加えた王澍でさえ「筆法は淳厚で小楷の模範とするに足る」と称揚している。その長期にわたる伝写の間に生じた誤写、及び数次に及ぶ編纂によって被った意識的な改竄なども考えられよう。ここでは真偽はひとまずおくとして、刻帖そのものの書について論じてみたい。

四

東牌楼簡牘の中には、楷書のひな型を想起させる簡牘が少数ながら存在する。一一二九号簡・一〇一七号簡などがそれであろうが、これら数簡の中にあって、とりわけ薦季直表の書風に近いものが存

（図5）東牌楼簡牘の「佚名書信（No.32）」（拡大図）

在する。「佚名書信（No.32）」である（図5）。上下部が残断し、一行で「至郅？鄉處惓々謝比得□□」とある。背面に文字はない。この書風も当時、広域に亘って行われていた一書風とみてさしつかえあるまい。わずか八文字ではあるが、薦季直表の書風と共通する（図6）。この東牌楼簡牘中の「佚名書信（No.32）」の八文字に類似する文字を薦季直表から抽出した文字を比較してみると次のようになる（図7）。薦季直表（以下、表と略記）の①終画の「王」と佚名書信（以下、書信と略記）の終画の横画は起筆を軽くあたり、収筆は隷書の筆意をもって自然に収めている。表の②の「郡」のツクリと、書信の「郅」のツクリはいずれも結体が自然で、末筆は懸針に近い抜き方である。同じく、表の③の「阝」も書信③と共通する。

（図6）東牌楼簡牘

（図7）薦季直表

表の④の「爰」の下部と書信の「夂」の部はいずれも行意が加味され、最後の右払いも収め方三角形を示し、類似している。表の⑤の「勿」の部と書信の「勿」部は結構の構えにおいても類似している。上部を大きく、下部を圧縮するような構造も共通する。表⑥の「爵」と書信の「謝」は楷書的に四角にまとめようとする構造がうかがえる。中心への回帰を軸にした「寸」のまとめ方は共通する。表⑦「老」の末筆と書信の「比」の末筆は隷書の筆意を帯びている。表⑧の「得」の「日」部は上部に重心があり、書信の「日」の上部と共通し結構も近い。なお薦季直表の「彳」はすべて「⺈」の形で統一されている。総じて表・書信ともに文字の上部に重心をもたせ、下部に至っては小さくまとめる。また横画はほぼ扁平で右肩上りの字がほとんどないのも共通する。さらに、この表と書信の共通点は、隷意が多分に残存していることであろう。書信の書写年代は、鍾繇の年齢から考えると一七歳から三十七歳の霊帝期、すなわち隷書の最盛期にあたる。薦季直表に隷書の筆意が濃厚に見られるのは、そのためであろう。楷書のひな型とでも言うべきこの佚名書信は、当時、後漢において形成された一書風と考えられよう。以上の類似点から、鍾繇は当時の書風の趨勢を鋭敏に感じとり、薦季直表の書の中に、その書風を投影させたのではないか、と推論される。東牌楼中の「佚名書信（No.32）」は、零細な一資料ではあるが、当時の一

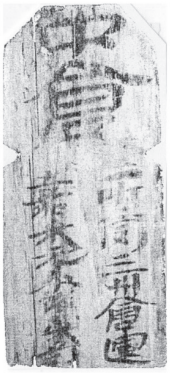
書風を形成していたことには違いない。薦季直表の中に見られる隷書の筆意の残存は佚名書信の隷意の残存とも共通し、さらにそれらを勘案すれば、鍾書の中では特異なこの薦季直表の書風も鍾繇の初期の楷書作品として位置づけられないか。

五

ところで鍾繇の書は古来能書人名にも「胡昭とを比較し、胡の書は肥え、鍾の書は瘦せていた」とある。梁の庾肩吾も「劉徳昇のよいところを二人は取り入れ、胡は肥えて、鍾は瘦せていた」とある。しかし東晋になると胡昭の名は聞こえなくなり、鍾繇だけが称せられるようになったのである。梁の武帝が陶隠居に与えた啓の中で「王義之は鍾繇を学ぶ時、字勢が巧妙に、字形が密になるが、自運すると、筆意が疎略に、字形が緩になった」と言っている。しかし薦季直表の作品からは、その書の特質を窺っても武帝のこの言葉の意味が判然とはしない。また肥瘦の観点からいっても薦季直表はむしろ肥にあたり、一致しない。したがってこれらの評は晩年の宣示表あたりの作品を指しているように推測される。宣示表は王僧虔の『論書』によると、「もと真跡は晋の王導が所持し、晋の南渡の時に、それを袖の中に隠して江南に逃れた。のちにこれを王羲之に贈り、羲之はさらに王脩に与えた。たまたま王脩が亡くなると母はついに棺に入れて葬った。」という。したがって、後世伝来したのは王羲之の臨本であるという。この記述からも宣示表が唐の褚遂良の『王右軍書目』や韋述の『叙書録』には記載されていることによって、その臨本が唐代に伝来したことが分かる。宋代には『淳化閣帖』をはじめ、他の数種の鍾書とともに刻された。ここにおいて、宣示表は広く流布するようになったようである。が、少なくとも伝来でみるかぎり、唐代において王の臨書として伝来したものからの刻入であることが知られる。ところで、宣示表の内容は、「呉の孫権が、魏に和親を求めて臣と称して附属するのを申し入れた。鍾繇が孫権は二心を抱くものではなく、真に魏に仕える意思があることを弁じて上書した」ものであるという。黄初二年（二二一）八月のころと推定される。鍾繇七十一歳、晩年の書ということになる。真偽は別としても、薦季直表ほどの古意には乏しいが、古来小楷書の好手本として伝来しているものである。薦季直表に比べると、その深化の様子が窺われる。薦季直表の扁平、前向きの四角張ったのに対し、宣示表は構成の楷書の原型とも言うべき力の均衡による右肩上がりの構成である。字勢の巧妙さも目につく。この宣示表の書写年代と「走馬楼呉簡」の書写年代は重なる。呉簡中のわずかな楷書作品と比べても、共通点も指摘できる。図8「兵曹」は簽牌（荷ふだ）の表題である。扁平、前向きの四角張った体勢から脱却し、やや右上

（図8）簽牌〈兵曹〉

（図9）



（図10）

がりである。また、隷書特有の波勢もない。下部の十字は行書に近い。実は楷書の原型に近い構成の思考は早くもこのころに生まれていたのである。図9「中倉」も簽牌の表題である。「兵曹」の表題と同様、立派な三過折を具えた楷書である。下の十一字はやや草卒な行書である。嘉禾三年の紀年が見られる。嘉禾三年（二三四年）は鍾繇の没年から四年後にあたる。いずれも表題であるから、あらたまった楷書で書かれ、下部は、くだけた行書で書かれている。図10の「庫」も同じく簽牌である。隋の墓誌を想起させる。『長沙走馬楼三国呉簡・嘉禾吏氏田家別』の官文書のほとんどが、この表題字の下部にみられる行書体と同じ書風で書かれている。三つの表題の楷書「兵曹」と「中倉」さらに「庫」に見る扁平な構成をした右上がりの楷書が、おそらく当時もっとも一般的な「楷書の原型」を示したものと思われる。ただし、この簽牌の表題と宣示表とを比較することも注意を要する。宣示表は王羲之の臨書作から出たとしても、原跡からはいくらか変化していること、その上に王の筆法が加わっていること、さらに模勒して刻するときの刻工独自のくせとも言うべきものが加味されていること。これらの要素を差し引いかねばならない。しかし、なお「兵曹」と「中倉」・「庫」の表題とは楷書様式においても共通する部分が多い。右肩上がり、起筆や履勢にかまえた送筆の穏やかさ、終筆はしっかりと止める。構成に至ってはいずれも、いまだ扁平に構える。しかし、刻本でありながらも宣示表に至っては意法の自然さ、結体の高古なたたずまいは鍾繇の面目をよく発揮している。王羲之が鍾繇を評して「天然第一」と言ったのも、この点を指したのかもしれない。また、胡昭の肥に比べて、鍾繇の書は瘦であったという。これをほぼ同年代の淳化閣帖中の張芝や呉の皇象の書に比べてみると、晩年の鍾繇の書は瘦なのであって、肥厚体から瘦体へという流れが、当時の風尚に合致したのかもしれない。王羲之の小楷楽毅論や黄庭経などは、鍾繇の瘦の部分を多分に受け継いだものと思われる。以上、鍾繇の楷書の実相を鍾繇が生きた時代の新資料をもとに省察し、薦季直表は、かれの初期の

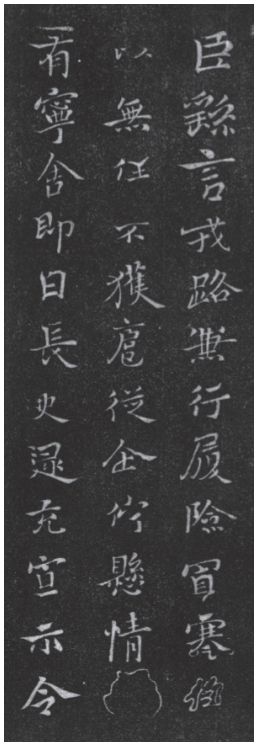
作品として推論し、さらに深化を加え、晩年において天然の趣を獲得したのが宣示表の作品と言えないだろうか。

六

さて、この鍾繇書のその後の系譜を辿ってみると、ヘディン（一八六五―一九五二）が、楼蘭遺址で発掘した図録（コンラディー本）の中に、紙文書に書いた「繇頓首頓首」（図11）の五文字が見える。コンラディーもすでに鍾繇の書を手習いしたものと解している。ち

（図11）繇頓首頓首

（図12）楼蘭晋残紙



（図13）賀捷表

なみに、ヘディン発掘の残紙は西晋の泰始二年（二六六）から建興（三一三）のものと考えられている。紙文書中の五文字を仔細にみると「繇」のヘン部は「缶」に書写している。鍾繇の法帖中には「缶」と書いた事例はなく、すべて「缶」に作っている。おそらく伝写の誤りか、あるいはすでに手習い用として作製された教本がこのように「缶」に作っていたのではないか。

ところで、当時の中原の漢人書派において書家の典型と考えられていたものは、清の阮元が言うように鍾繇、衛瓘、索靖の三人であった。やがて、王羲之の出現によって、衛・索の名は消えて鍾・王の二人となるわけである。晋の泰始期（二六五～二七四）から永嘉期（三〇七～三一二）、さらに永和期（三四五～三五四）へと移り変わる姿は、中原のその時期の新しい様式は李柏尺牘などの出土資料から窺うと、まさに同じであり、江南の新しい書風も刻々とこの西

偏の土地に伝えられていたことがわかる。鍾繇の書を手習いした残紙が出土したのも、西偏書派（西はニヤから東の楼蘭、北のトルファン、さらに東の敦煌地域）の最初の段階は、鍾・衛・索の影響下に出発したことを裏づける資料といってよいであろう。さらに、残紙中に鍾繇の脈流を想起させる一点がある。残紙中でもやや異質なな書風である（図12）。隷書の技法と楷書の要素とを混在させ、細身の鋭い筆力ときびしい構成法は全体を力で統一した、独特の性格を築いている。ところで、法帖に伝えられる鍾繇の書の中にも、この残紙と類似した賀捷表がある（図13）。一に戒路表ともいう。この点は、西川寧氏にも指摘がある（『西川寧著作集』巻一）。鬱岡斎帖や玉煙堂、宝賢堂帖などにも刻入されている。真偽についても難しいものではあるが、鬱岡斎帖に刻まれたこの帖と比較すると、全体を力で統一し、横画はことのほか長く、右払いにおいてはほってり膨らみをもたせて伸長させ、三角形状で終わっている。このような独特の表現法を見ると、残紙との共通性が指摘できよう。『四体書勢』の中に、「鍾繇は行書を得意とし、劉徳昇に学んだが、鍾繇の書には、やや変化があった。」とあるが、このような姿態を指すのかもしれない。

これらの論をまとめてみると、次のことがいえるであろう。法帖に刻入された書は、言うならば、実は後世に編纂された伝世文献であり、長い伝世過程での誤字や故意の書き換え、あるいは偽作のリスクが常につきまとう。それに引きかえ、漢の東牌楼簡牘や、呉の走馬楼呉簡、あるいは楼蘭出土の残紙類は当時の生の出土文献なのである。人間が編纂意図をもって作り上げた、いわば著作物ではなく、現実の生きた社会の中から生み出されたものばかりである。

したがって、この出土文献を検証、精査することによって、伝世の文献をあらたに照射し直し、体系化を試みることが、今後大きな課題といえるのではないか。

【注】

東牌楼簡牘に関する論文は以下のごとくである。

（1）劉濤「東牌楼東漢簡牘の書体・書法と書写者について」（長沙東牌楼東漢簡牘）文物出版社）

（2）福田哲之「東牌楼漢簡牘による法帖の検証」（『書学書道研究18』）

（3）大橋修一「行書の発生とその展開」（『大東書道研究』平成一七）

（4）横田恭三「楷書の発生―東牌楼簡牘からみた楷書書法―」『全国大学書道学会紀要』（平成一八年度）